

名詞・形容動詞周辺の漢語における統語的・意味的性質

——「最」の形をとる語について

町田 互

キーワード

形容動詞、ナ形容詞、第三形容詞、ノ形容詞、名詞、副詞、品詞性、統語論、意味論、漢語、最高、最低、最悪

1. 語の統語的なふるまい

日本語の語彙には、典型的な品詞の統語的特徴に当てはまらず、複数の品詞の特徴を持つものが存在する。

例えば、「相当(だ)」という語を例にとってみよう。

- ①・決断するには、相当な覚悟が必要だったはずである。
- ②・事件を知っただけでも相当のショックだったろうと同情していたんです
- ③・彼女が本格的に仕事につくのは、相当、先のことになる、と覚悟しなければならぬ。
- ④・マフィアの友情は日本人の義理に相当するとルイスは説明している。

①の例では、「相当な(覚悟)」のようにいわゆる形容動詞(ナ形容詞)の形をとり、②の例では「相当の(ショック)」と一般的には名詞とされる形をとっている。また、③では「相当(、先のことになる)」と副詞として用いられており、④では「(義理に)相当する」と動詞の形をとっている(④は意味内容としても他とは異なる)。

このように単純に「名詞である」「形容動詞である」とは言い表わしにくい語は少なくない。松本悠哉氏は、このような用法は広く行われており、例外的な用法と扱うべきではないと論じている。

漢語においては、この多品詞性がより頻繁に見られる。村木新次郎氏や、野村雅昭氏は、漢語全体について、その品詞性を体系的に述べている。本論では、10語程度を対象とすることで、一つの語について、詳細に考察を加えたい。

漢語の統語的ふるまいは、その最後に位置する漢字(接尾辞)と密接に関わることが多い。例えば「・性」「・的」「・化」等で

ある（接尾辞は二字以上の場合もある）。「可能性」「関係性」「方向性」など「・性」の形をとるものは、格助詞「が」「を」等が後接し、文の主語・補語となる名詞になる。「具体的」「一般的」「伝統的」等「・的」となるものは「・な」「・に」等の形をとって形容動詞となる。また、「合理化」「国際化」「多様化」等の「・化」となるものは名詞的なふるまいの他に、「・する」の形をとって動詞となる。

一方、先頭に同じ漢字（接頭辞）をもつ語は、その統語的ふるまいは単一ではなく、広い幅を持っている。本論では、そのような語について、コーパスを用いて調査を行い、その統語的性質、特に典型的な性質に収まらないものについて詳細に分析したい。

2. コーパスによる調査と分析

2. 1. 調査対象とする語、および使用するコーパス

今回対象とするのは、「最高」「最悪」のように「最」を接頭辞とする以下の漢語である。同形式の対義語があるものとした。

最高、最低
最大、最小
最新、最古
最強、最弱
最長、最短
最良、最善、最悪

例えば「最高」は語の意味内容としては「最も高い」という意味を表すことになるが、国語辞書では、形容動詞的な用法も有する名詞とされることが多い。現代日本語書き言葉均衡コーパス^④（以降、BCCWJとする）では、「名詞・普通名詞・形状詞可能」と分類されている。

語形成と語の統語的ふるまいとは別の問題であり、先に挙げた語はBCCWJですべてが同一の品詞に分類されているわけではない。対義語同士でも異なる品詞とされる場合もあり、そのような場合、どう異なっているのか、調査により明確にしたい。

〔BCCWJで「名詞・普通名詞・形状詞可能」とされるもの〕
最高、最低、最弱、最悪

〔BCCWJで「名詞・普通名詞・一般」とされるもの〕
最大、最小、最新、最古、最強、最長、最短、最良、最善

国語辞書では「名・形動」のように名詞と形容動詞の特徴を兼ねる品詞表示が行われており、『大辞林』第三版^⑤では、「最高」「最低」「最悪」は「名・形動」とされている。

村木氏は、従来名詞とされていたものに、「抜群・の」「真紅・の」といった「ノ形容詞」あるいは「第三形容詞」と呼んでよいタイプがたくさん存在するとし、その特徴として次の五つを示している。

①主語・補語にならない

② 連体修飾を受けない

③ 後続の名詞を属性規定する

④ 述語として用いられる

⑤ 後続の動詞（ときに形容詞）を修飾する修飾成分として用いられる

「①と②は、これらが名詞でないことを意味する。③④⑤は形容詞の特徴である（ただし、形容詞に属するすべての単語が、3つの特徴をそなえているわけではない）」と述べて、その統語論的・意味論的特徴から名詞ではなく、形容詞とみなすべきとしている。

なお、古典文法では、このように連体修飾の形として「・の」という形を形容動詞がとることを、従来から一般的に認めている。

ここで、第三形容詞も含めた、各品詞の形式を、典型的な例を用いて確認しておこう（名詞と形容動詞を並べて比較するため、活用語尾や接辞等の区別をしていない）。

動詞：	連用（／中止）	・	連体	・	述定
形容詞：	読んで／読み	・	読む	・	読む
形容動詞：	高く／高くて	・	高い	・	高い
第三形容詞：	静かに／静かで	・	静かな	・	静かだ
名詞：	抜群に／抜群で	・	抜群の	・	抜群だ
副詞：	雨で	・	雨の	・	雨だ
	必ず	・	―	・	―

これらはその品詞の典型的な形式であって、語によっては「相

当」のように、一つの品詞の形式にとどまらず、複数の品詞にまたがった形式をとるものもある。

次節以降、「最高な」「最悪な」あるいは「最高の」「最悪の」のように同じ形式ごとにBCCWJの用例を挙げ、考察を加えていくこととする。

2. 2. 形容詞（形容動詞）としての用法

ここでは形容詞（形容動詞）の形式として「・な」「・に」の形をとる場合をみていく。「温暖な」のような形容動詞（ナ形容詞）は、「あたたかい」のような狭義の形容詞（イ形容詞）と統語的・意味的には共通するため、どちらも広く形容詞のくくりにまとめられることがある。「極寒の」のような「・の」の形も同様の統語的・意味的特徴をもつため同じくくりに入れ、こうした語を名詞＋格助詞「の」ではなく、形容詞（ノ形容詞、第三形容詞）として扱う。

「・な」形式

「・な」の形で連体修飾するのは典型的な形容動詞の用法である。

なお、「・なので」「・なのだ（なんだ）」等の用例は、典型的な名詞においても同様の形をとるので、ここでは扱わない。また、「世界最高」「史上最弱」のような例における「最高」「最弱」は単語というより、複合語の語基とも考えられるので、本論ではそれらを「最高」「最弱」の用例としては数えないこととした。今

回調査した語の中では、複合語で用いられる場合がほとんどである語もあった。

以上を踏まえた上で、今回調査対象とした語のうち、「・な」の形で連体修飾する用法（以降「・な」形式とする）の例がみられなかったのは、「最古」「最弱」「最長」であった。用例のみられた他の語も用例数が1や2といった少数の語が多く、後にみるような「・の」の形と比べると使用頻度が少ないことが明らかになった。

以下、BCCWJの用例の一部を挙げる。なお、一文すべてではなく、前後を省略した場合もある。

「最高な」「最低な」

・言葉に表現出来ないけど凄く最高な感じ。

・平気で人の心を傷つけ、何に対しても優しくなれない、嫌味で最低な人間に変わってしまいました。

「最大な」「最小な」

・要介護老人の基礎疾患として最大な疾患は脳血管障害である。

・料金規制を最小なものに限定することに役立つ。

「最強な」

・これらが合体させたら最強なキャラクターになるんじゃないか
「最短な」

・都市t_jから都市t_iに行く道の中で最短なもの長さ

「最良な」「最善な」「最悪な」

・内装も木目調のあたたかい雰囲気で、入院患者の療養に最良な環境となっています。

・真実の瞬間を最善なものにするには
・電話事情の最悪なテヘラン支局で、日本に繋がらずじりじりとした思いにかられる時

いずれの例も、後続の体言の属性を示す連体修飾であるが、人によっては、ややこなれない印象を感じるかもしれない。こうした感覚は個人によって異なるものであるが、いずれにせよ「・な」の代わりに「・の」の形をとれば自然であると感じる場合がほとんどであろう。今回の調査に限っていえば、「最高な」「最低な」「最悪な」の用例数が比較的多くみられ、これらの語については、一般的な用法と認めてよいと思われる。後で詳しく述べるが、これらの語は意味的に「最高の」「最低の」「最悪の」とは微妙に異なり、「・な」形式のほうが、より感情的・評価的な意味合いを持つ場合がある。

「・の」形式

前述のように、連体修飾の際に「最高の」のような「・の」の形をとる場合、従来、名詞+格助詞「の」であるとされていたが、後続の体言の属性を示す場合は、形容動詞や形容詞が体言を修飾する場合と統語的・意味的に共通しているため、形容詞（ノ形容詞）として、この節で扱う。

今回調査対象としたものの中では「最弱」にはこのような用例が見られなかったが、その他のすべての語で、用例が多くみられた。また、「最弱」も「過去最弱のチーム」のように複合語の形では用例がみられた。

「最高の」「最低の」

・そんな最高の一日を、東京が誇る最高のホテルで過ごしてみませんか？

・そんな最低の生活の中でも、私はある日を境に

「最大の」「最小の」

・北半球で最大の祭典に育て上げたいという希望です。

・適切な場所へ適切な時に望ましい状態で最小の費用で届けることが強く要請されている。

「最新の」「最古の」

・常に最新のデータを共有できる仕組みを実現しています。

・ハーブ療法は、最古の治療法である。

「最強の」

・生物としての人間はけっして最強の動物ではない。

「最長の」「最短の」

・国家元首として最長の在位期間を維持していた。

・つねづねワタシが最短の道だと考えているのは

「最良の」「最善の」「最悪の」

・強い株に育てていくのが最良の方法です。

・それは弟が最善の努力をつくした上での結果論であり

・米ソ間での交渉が進められ、最悪の事態はまぬがれた。

・私はかつて受けもつた中で最悪の学力の学生であったそうだ

「最悪の」は、「最悪の事態」「最悪の場合」のような状況を示す語が続くことが多い。

「悪性」のような従来名詞として扱われてきた語で状態性の意味を強く有する語は、「・の」形式だけでなく、「悪性な」のように「・な」形式をとるようになる傾向があるという。^⑨

・今回で4枚目となるこのアルバムは、夏の砂浜、夏の夜に最高な一枚。

この「夏の夜に最高」は、統語的には「夏の夜にふさわしい」と同様に補充格をもつ用法であり、これは当然、名詞ではなく形容詞（形容動詞）の統語的特徴である。この例を仮に「・の」形式にして「夏の夜に最高な一枚」としても、同様の意味を有することからも、こうした状態性の意味を強く有する「・の」形式は形容詞の分類とみなすことができる。

・若手をTESTするのに最高の場なのに

この「TESTするのに最高の場」が、その補充格をもつ例である。

このように「・の」形式と「・な」形式は、ほぼ同じ意味をもつと考えられるが、「・な」形式のほうが感情的・評価的な意味合いが強い場合がある。

・日本は建物もきれいで人は親切で最高な所ばかりね。

・こんなめちゃくちゃな最低なことは経験したことがねえ。

・最悪なことに、彼らは要求を尊重しない者の子どもに対して復

聳めるのだ

これらの「・な」形式の例では、仮に「・の」形式にした場合と比べ、表出者(話し手)の感情が強く感じられる。また、「最悪なことに」は「最悪のことに」の形をとると不自然である。このような「・ことに」は、「嬉しいことに」「残念なことに」「不思議なことに」等、その文の表出者による評価を表すような語に後接して用いられることから、この場合の「最悪な」が評価的な意味を強くもつことがうかがえる。

「・」形式

形容動詞は「・に」の形をとり、連用修飾する(以降「・に」形式とする)。ただ、形だけを見た場合、「・になる」「・に変わる」のように変化を表す場合は、「学生になる」のような名詞+助詞「に」と形態は変わらないため、今回の調査ではそのような例は扱わない。

今回の調査で「・に」形式の用例がみられなかったのは、「最新」「最古」「最弱」「最長」「最短」であった。

「最高に」「最低に」

- ・みんなが楽しそうにがんばっていたのが最高にうれしいです。
- ・試合自体は最低におもしろくないですけどね

「最大に」「最小に」

- ・米の旨味を最大に引き出すことをモットーとし、五百万石やアケボノを原料米に用いている

・彼の呼吸は最小に抑えられ瞬きも右目と左目をローテーションで最小限に行っていた。

「最強に」

・そこで友達の家とか遊びに行くと家が大きくて部屋も最強に広いです。

「最良に」「最悪に」

・土地は、いまや資源である。したがって、最良に利用する人々の手に渡るべきだ。

・仕事でも今最悪にストレスを抱えていて、それを わかつてはいるもの……

「最高に」「最低に」「最強に」「最悪に」は、ほとんど「非常に」と同じ意味で用いられている例がみられた。

「最小に」は、今回の調査では、後統の動詞が「最小になる」「最小にする」以外で「最小に抑える」の「抑える」のみであった。

2. 3. 名詞としての用法

名詞の統語的性質の典型は、主語や補語となることである。今回の調査では、格助詞「が」や「を」が後接する用例を対象とした。なお、「・の」の形は、後統の体言の属性を示すなら形容詞(ノ形容詞)であり、後統の体言との関係を示すなら名詞であると考えられることができる。

「・が」形式

主格を示す格助詞「が」が後接する（以降「・が」形式とする）用例のみ扱う。「私は答えがわかる」のような対象を示す例は除く。

「最高が」「最低が」

・それでも、この一年間、百パーセントに達した日はなく、最高が九十パーセントだった。

・今日の気温は最低が5.0度、最高が十八.0度、昨夜十一時頃は深い霧だったのです。

・今までの経験からいうと南下するほどまずく、最低がアンダルシア地方であった。

「最大が」「最小が」

・東京での月の南中は二十三時四十七分で、月食の最大が二十三時十二.三分ですから、

・金利変動は最大が十一%、最小5%となるような正弦波とする。

「最新が」

・最新が最良か？

「最長が」

・角も最長が十一センチ、しかもメスにははえず、有力な武器にはならない。

「最悪が」

・ささいなことで「サイアク」と言う人がいますが、こういう人は毎日最悪が更新されている事に気づいているのでしょうか？

「・が」形式の用例は全体的に数が少なく、「最古」「最強」「最弱」「最良」「最善」の用例はみられなかった。このことから、今回対象とした語は、典型的な名詞とは異なる統語的・意味的特徴を持つと考えられる。「・の」の形をとる用例数は多いが、前述のように、その多くは属性を示す形容動詞（形容詞）としての用法であり、名詞としての用法ではない。

個別の語についてみると、「最高が」は、気温に関する用例が全体の大部分を占めていた。

「・を」形式

格助詞「を」は、主に動作・行為の対象を示す。

今回の調査で、格助詞「を」が後接する（以降「・を」形式とする）のは「過去最高」「史上最高」のような複合語となる場合が多かった。「過去最高」の「最高」は、複合語の語基であり、単語ではないため、こうしたものは用例として数えない。

「最古」「最弱」「最短」は「・を」形式の用例がみられなかった。また、「最高」「最低」「最大」「最善」以外は、用例数が少なかった。

「最高を」「最低を」

・経常利益は来年三下期、一兆円を大幅に上回って最高を更新するのが確実視されている。

・本当に注意を払っていれば―興味を持ち、最高を求め、他者を一番に考え、目と心で聞き、共に過ごし、心を開き、

・シグナル・ホイップ（合図用ムチ）の長さは最低を1mからとして、レース運営団体が制限してもよい。

「最大を」

・日本籍の客船で最大を誇る豪華客船「飛鳥Ⅱ」。

「最善を」「最悪を」

・安全のために最善を尽くすべき製造業の責任者の不正行為は極めて遺憾だ。

・昭和四十七年に統計を取り始めて以降の最悪を記録した。

「・を」形式の用例は、「・を記録する」「・を更新する」「・を達成する」「・を誇る」等、決まった語を伴うものが多数を占めた。「最高を求め」のような、それ以外の用例は、ほとんどが海外作品の翻訳であった。また、「最善を」は、後続の動詞が「（最善を）尽くす」である場合がほとんどであった。

以上のように、今回調査対象とした語については、名詞としての用法は限定的な場合が多いことが明らかとなった。

2. 4. 副詞的用法

副詞としての用法（以降、副詞的用法と呼ぶ）とは、「最高に」のような「・に」の形をとるのではなく、「最高」のみの形で連用修飾する用法である。なお、副詞とされる語には「特に」のように「・に」の形をとるものもあるが、本論で扱う語の場合、形容動詞（形容詞）として属性を示す「・な」や「・の」の形をもつため、「・に」の形は形容動詞の用法として扱う。

「最高」「最低」

・最高、何時まで小学校にいたことある？

・最低、対人保険と対物保険は入っておくべきでしょう。

「最長」

・申告期限は、最長、原則2カ月、特例2カ月の計4カ月となりました。

・長くて、数時間。最長、二、三日。

「最悪」

・逆に切れ味の悪い包丁では、どうしても無駄な力が入り、最悪、手元が狂ったりする。

・最悪、引き分けでもいいかなあ。

「最低」は「最低限度で」の意味で用いられる例があった。「最悪」は「最悪の場合で」の意味で用いられている。これら副詞的用法の意味は、「・に」形式の場合の意味と異なっている。⁽¹⁰⁾「・に」形式の例でみた、「今最悪にストレスを抱えていて」は「程度として最も悪い段階でストレスを抱えていて」の意味になるが、「最悪、引き分けでもいい」は、「一番良い場合よりは一段（数段）下がる場合、引き分けでもいい」という意味になる。

また、「最高にうれしい」は、どのくらいうれしいのか程度を表しているが、「最高、何時まで小学校にいたことある？」は、「最も程度が高い場合、何時まで小学校にいたことある？」の意味になる。「最低」も同様である。

「・に」形式と副詞的用法をもつ「相当」は、「相当に難しい」

「相当難しい」のどちらの例も同じ意味であり、「大変」も「大変に美しい」「大変美しい」と同様である。これと比較すると、「最高」「最低」「最悪」が「・に」形式と副詞的用法において意味が異なるという点は注目に値する。

2. 5. 述定用法

「・だ。」「・です。」のように述語になる用法（以降、述定用法と呼ぶ）は、すべての語で用例が見られた。

- ・僕は何度「こりゃあ、最高だな…」とつぶやいたことだろう。
- ・もう会えたら最高。
- ・綾子、あんた最低だ。
- ・「もーッ、最低！」由紀は怒ってみせたが、とても嬉しかった。
- ・少女の口から、黒川丈の名前が出る。最悪だ、と丈は思った。
- ・「あつ。そうか！ 最悪！」愕然としたレイアードが頭をかかえた。

「最高だ」「最低だ」「最悪だ」は、表出者の感情や、評価の表出となる場合がみられた。またこれらの語は、下に「だ」のつかない、いわゆる形容動詞の語幹の用法も多くみられた。

3. 単語を基準として

これまで形式ごとに用例を取り上げ、分析してきたが、本節で

は、各語を基準として対義語ごとに整理し、さらに考察を加える。今回の調査で対象とした形式は「・な」「・の」「・に」「・が」「・を」の各形式と副詞的用法、述定用法である。

「最高」「最低」

「最高」も「最低」もすべての形式の用例があるが、「最低に」の用例は1例しかなかった。

「最大」「最小」

副詞的用法は、「最大」が1例、「最小」の用例はみられなかった。その他の形式は「最大」「最小」ともに用例がみられたが、「・な」「・が」「・を」の用例数が少なかった。

また、「最小を」は1例で、「最小に」は後続の動詞が「（最小に）抑える」のみであった。

こうしたことから「最大」「最小」は連体修飾する際「・の」の形をとる、ノ形容詞の形式が基本であると考えられ、「最大」に比べて「最小」は、限られた範囲の用法となっていることがわかった。

「最新」「最古」

「最新」「最古」は「・の」以外の形式が少なく、「最新な」が2例、「最新が」が2例のみであった。

このことから、「最新」「最古」は、「・の」の形で連体修飾する用法を中心とするノ形容詞だと考えられる。

「最強」「最弱」

「最弱」は今回の調査の対象としては用例がみられなかった。調査対象とは異なる形式だが、以下のような用例がある。

・現在は東アジア選手権の4チームでは最弱ですよね？ 文句なしに最弱でしょう。

「最強」「最弱」は、対義語ではあるが、圧倒的に「最強」のほうが多く用いられる傾向にあり、その用法はノ形容詞型である。また、「最強」は「最強に」の形で、程度が甚だしいという意味を表すユニークな用例もみられた。

「最長」「最短」

「最長」「最短」は、「最新」「最古」と同様に「・の」以外の形式が少なく、「最長が」3例、「最長を」2例、「最長、」（副詞的用法）3例、「最短な」1例、「最短が」1例のみであった。

したがって「最長」「最短」は、「最新」「最古」のように、「・の」の形で連体修飾する用法を中心とするノ形容詞だと考えられるが、「最長」に副詞的用法がみられるのは注目すべき点である。

「最良」「最悪」「最善」

3語とも、「・の」の形式が多く用いられる点は、他の語と同様である。

それ以外では、「最良」は、「・に」「・を」の用例が1例ずつあること他に、「・な」の形式が数例あることが特徴である。「・の」形式のほうが、「・な」形式より圧倒的に多くはあるが、他の1、2例しかない用法と比べると、「・な」形式も許容される

用法とみてもよいだろう。

以上のことから、「最良」は、連体修飾の際に「・の」と「な」の両形をとることを中心的な用法とする形容詞（形容動詞）と考えられる。

「最善」は、「・の」形式の他には、「・な」が2例、「・に」が3例みられた他に、「・を」形式の用例が多数あった。しかし、「・を」形式は、後続の動詞がほぼすべて「（最善を）尽くす」であり、これは慣用句のような決まった言い方であり、統語的には例外とすべきであろう。

したがって、「最善」は、「・の」形式の用法を中心とするノ形容詞だと考えられる。

「最悪」は、他の「最良」「最善」と趣を異にしている。「・の」形式の他に、「・な」「・、」（副詞的用法）形式の例が多数あり、「・に」が3例、「・が」が2例、「・を」が1例みられた。

「最悪の」は、後続の語として「場合」「事態」「状態」が多くみられたが、「最悪な」も同様の傾向がみられた。

「最悪」の副詞的用法は、「最高」と同様に「・に」の用法とは意味が異なる。

副詞的用法の用例が多数みられた「最高」「最低」「最悪」に共通するのは、いずれも「・な」形式も多数見られるという点であったことは興味深い。

4. まとめ

「・の」の形をとって、後続の体言の属性を示す語を「ノ形容

詞(第三形容詞)とし、形容動詞(ナ形容詞)や狭義の形容詞(イ形容詞)とまとめて、広義の形容詞とする考えを踏まえ、本論では、約1億語のサンプルからなる現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いた調査を行い、考察を加えた。

調査対象としたのは、「最・」の形をとる二字漢語で、対義関係にある「最高・最低」「最大・最小」「最新・最古」「最良・最短」「最良・最悪・最善」である。

連体修飾や連用修飾、格助詞が後接する場合等、様々な形式をとる中で、ある語が、一つの品詞の典型的な形式の範囲にとどまらず、他の品詞の形をとることがある。そうした現象を踏まえ、コーパスの用例を調査したところ、同じ「最・」の形をとる語であっても、実に様々な形式をとることがあり、単純な法則で説明することはできないということが明らかになった。

例えば「最高」は、「・な」の形で連体修飾し、「・に」の形で連用修飾するという典型的な形容動詞の形式と、「・の」の形で連体修飾するというノ形容詞の形式のどちらも多数みられ、格助詞「が」「を」が後接して文の主語や補語となるという典型的な名詞の用法の例も多くあった。さらに、「最高」のみの形で副詞として用いられる副詞的用法の例も多くみられた。一方「最弱」は、他の面では「最強」と同様だが、「・に」形式の用例が1例のみであり、用いられることの少ない用法であることがわかった。なお、「最強に」のユニークな用例として、ほぼ「非常に」と同じ意味で用いられる場合もみられた。

「最新」「最古」等は、「・の」形式をとることが多く、他の用例はあまり見られず、「最高」「最弱」とは統語的特徴が大きく異

なっている。

対義語同士は同じ形式をとるとも限らない。「最良」「最悪」「最善」は、対義関係にあるが、その統語的特徴は異なっていた。

「最悪」は「最高」「最低」と似た特徴をもち、これらの語は「最悪に」の形で連用修飾する場合と「最悪」のように副詞的に連用修飾する場合は、意味が異なっていた。「最高にうれしい」の「最高に」と、「最高、何時まで小学校にいたことある?」の「最高」は、その意味が異なる。これは「相当に難しい」「相当難しい」や「大変に美しい」「大変美しい」のように、どちらの形でも意味が変わらない語が多い中で、注目すべき特徴であり、「最高」「最低」「最悪」の副詞的用法は今後さらに詳細な考察が必要である。

また、「最高」「最低」「最悪」は、「・な」の形の用例が比較的多くみられたが、これらの語では、「・な」形式のほうが「・の」形式より、感情的・評価的な意味合いが強い場合があることがわかった。

今後の展望としては、さらに別の語を対象にすることや、複合動詞の語基を対象にすることも視野に入れ、調査を広げることが考えられる。

注

- (1) 松本悠哉「語幹に格助詞を伴う形容動詞の用法について」『東京大学言語学論集』38、二〇一七年
- (2) 村木新次郎「漢語の品詞性を問う」『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房、二〇一二年
- (3) 野村雅昭「品詞性による字音複合語基の分類」『現代日本語の探究』東京堂出版、二〇一三年
- (4) 「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」(中納言)、国立国語研究所。本論で先頭に「・」付きで示す用例はすべてこれによる。サンプル数、約1億語。なお、BCCWJのサンプルには翻訳小説やインターネットサイト「Yahoo!知恵袋」のものも含まれる。本論では、用例として挙げたものを、その語の正しい用い方であると認めようとしている訳ではなく、あくまでもコーパスにみられた用例として分析の対象としている。
- (5) 松村明 編『大辞林』第三版、三省堂、二〇〇六年
- (6) 村木新次郎「日本語品詞体系のみなおし」形式重視の文法から意味・機能重視の文法へ」『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房、二〇一二年
- (7) 沖森卓也「いわゆる形容動詞をめぐって」(立教大学日本語研究)13、二〇〇六年三月)による。
- (8) 町田互「形容詞の品詞性について—ナ形容詞、第三形容詞、第四形容詞と—」(立教大学日本文学)100、二〇〇八年七月)では、ノ形容詞(第三形容詞)を含め、形容詞、形容動詞やその周辺の品詞との統語的・意味的特徴について考察している。
- (9) 注7に同じ。
- (10) 藪崎淳子氏の「「最悪」考」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』51、二〇一五年三月)では、「最悪」の一語に焦点を当て、このような用法を「単独用法」として詳しく論じている。
- (11) 町田互「形容動詞の諸問題」(『品詞別学校文法講座 第三巻 動詞・形容詞・形容動詞』明治書院、二〇一五年)で触れた。(まちだ わたる 拓殖大学講師)